**発表者：小泉空（大阪大学）　　司会：山田正行（東海大学）**

**「セキュリティと集団性―ポール・ヴィリリオのセキュリティ論」の報告概要**

　本発表は、フランスの思想家ポール・ヴィリリオのセキュリティ論を、かれの60～80年代のアメリカ都市についての分析を一つの素材として解き明かそうとした。「はじめに」では先行研究におけるヴィリリオのセキュリティ論の位置づけを確認した。次いでヴィリリオにおけるセキュリティは集団の形成というモメントと結びついている、という本発表のセキュリティ論の位置づけを示した。第一章では、議論の導入として、都市反乱が相次いでいた60年代のアメリカ都市についてのヴィリリオの分析を紹介した。次いでヴィリリオが、アメリカ都市の分断の問題を、セキュリティの自己責任化としてとらえていたことを示した。第二章では、集団形成としてのヴィリリオのセキュリティ論を理論的に基礎づけるために、かれの都市論を論じた。そこでヴィリリオにとってセキュリティとは、都市の城壁によって担保される住民の空間的・時間的余裕であることを示し、都市とはこの空間・時間としてのセキュリティを共有する集団単位（市民）であることが明らかになった。第三章では再びアメリカ都市の事例にもどり、ヴィリリオのアメリカ都市論をより詳細にみていった。ヴィリリオにとってアメリカ都市の混乱とは、脱産業化、あるいは白人層の郊外流出によって、かつての都市のまとまり（セキュリティ単位）が崩壊し、空間的・時間的余裕がなくなった結果であることが明らかになった。また都市という集団単位を重視するヴィリリオの立場を明確化するために、かれが当時批判していたアナルコキャピタリズムの議論を部分的に紹介した。「おわりに」では、ヴィリリオの議論のフランス現代思想における位置づけを見るために、フェリックス・ガタリの70年代のアメリカ都市に対する分析とヴィリリオの議論を比較した。

**質疑応答概要**

　本発表には二つの質問が投じられた。はじめの質問は、先行研究における本発表の位置づけ（テクノフォビア的なヴィリリオ像に対する異議）が、原稿全体でどのように論証されているのかというものだった。発表者は論証の不足を認め、次のように説明を補足した。先行研究ではヴィリリオのセキュリティ論は、ミクロなセキュリティ技術についての分析に焦点を当て、ミクロなセキュリティが増殖している理由を技術そのものの発展に求める傾向があった。対して本研究は、マクロなセキュリティとしての都市に着目したところに独自性があり、マクロなセキュリティからミクロなセキュリティへの移行には、単に技術の発展だけではなくより政治的な状況の断絶が関係していると主張した。

　二つ目の質問では、「おわりに」でのガタリとの比較は、双方の後年のテキストまで射程に入れなければ有意義な比較にならないのではないかというものだった。発表者はこの指摘を受け入れ、今後の研究の課題とした。また、さしあたり両者を比較するにあたっては、ヴィリリオの「戦争機械」概念が『千のプラトー』でいかに転用されたかが大きな問題となる、と今後の展望を示した。